

「二〇〇六年年頭司教書簡」

高松司教 フランシスコ・ザビエル 溝部 脩

2006年元旦にあたりまして、教区民である全ての司祭、修道者、信徒の皆様にあいさつを送ります。就任以来一年半、教区長である私の意向にそってご協力頂いたことを、この場を借りて感謝申し上げます。幸い昨年末念願の司牧評議会が誕生したこともあり、司祭評議会と合わせて、この二つの両輪に助けられて教区の統治を続行する所存でございます。本年も、昨年同様、教区における「一致への歩み」を更に深めていきたいと強く希望しております。更なるご協力を教区の皆様をお願いいたします。

昨年は「聖体の年」と銘うって、全教会には教皇様の意向にそって、聖体への特別な信心を深めることが勧められました。残念ながら、私たちの教区では、司教就任後間もないということでもあり、もっと切実な問題に直面しましたので、「聖体の年」であつても、教皇様の意向にそって過ごすことができませんでした。しかし、司教就任二年目に入り、少し落ちついた雰囲気を感じられるようになった今、遅ればせながら、今年を「聖体の年」としたいと思えます。

これには多くの利点も考えられます。まず、昨年聖体についての資料が多く出版されていること、また「世界司教会議」

が終了した今、むしろ聖体への意識がもっと深められる機会が提供されていることなどによります。昨年出版された多くの資料を参考にして、教区の全ての行事、企画、研修会を通して、聖体への熱い想いを深めることといたしましょう。

1 秘跡全般の理解がまず最初

聖体を理解するためには、まず秘跡とは何かを理解することから始めないといけません。秘跡とは目に見えるしるしを通して人間の生活に働かれる神様の恵みです。しるしをしつかりと読み取ることが私たちにとっては大切なことです。具体的には洗礼の時の水、堅信と病者に授けられる香油、ミサ中に捧げられるパン、結婚の誓いのことば、司祭叙階の時の按手、ゆるしの秘跡におけることばなどです。このしるしとことばを持つ教会も「偉大なる秘跡」と呼ばれます。目に見える信仰者は目に見えるしるしであり、それを通して神様が働かれ、この世界に恵みをもたらすからです。

教会には7つの秘跡があります。今年それら全てを深めることはできませんが、少なくとも入信の秘跡である洗礼と堅信、ミサ中に聖別される聖体の秘跡についてはそれを

深めることができます。何故私たちは信者として神様から呼ばれたのでしょうか。教会に属するとはどういう意味なのでしょう。何故主日にミサにあずかり、聖体を頂くのでしょうか。洗礼を受けていない人々とどこがどのように違うのでしょうか。聖体を頂くとはどういう意味があるのでしょうか。これらをつきつめるのが、今年の教区の課題となります。

2 今年ミサ典文の再版の年にあたっている。

幸いなことに、現在司教団は日本語版のミサ典書の再版を目指しています。これは単に日本語の改訂版が出されたのとは趣が違います。どのように、日本において美しく典礼を執り行うことができるかということです。美しい日本語、日本の伝統と美に裏付けられた動作、所為の意義、これらを探求することでもあります。今年一年をかけて、どのように典礼を、特に主日の典礼を美しく、そして心あるものにしていけるかを、しっかりと見極めていく年といいたしましょう。

そのためには、各小教区の典礼委員会、または典礼担当者にはしっかりと典礼とは何かを学ぶ必要があります。これ

は日本人に課せられた大きな課題です。外国の宣教師に多くを頼ってきた日本の教会ですが、今こそ日本人の信徒が目覚めて、日本教会建設ということにかけていかなければなりません。四国の教会もその例外ではありません。多く苦勞してこの教区のために働いて下さった、また下さっている外国籍の宣教師への最大の感謝は、日本の教会が母国語で美しく典礼を執行することができるまでに成長したことを示すこと、これだと思っています。典礼委員、または典礼担当者とは、単に聖歌の番号を教えたり、読書の人を決めたりすることのみではなく、むしろどのようにすれば共同体を、典礼を通して高め、キリスト者としての意識を高め、豊かになるかを考えて奉仕する人たちのことです。

同様に、司式する司祭の役割はとても大切です。きれいに、美しく、そして会衆に分かるように司式しなければなりません。ことばはとても大事です。また動作、所為は見る人に祈る姿勢を教えるものでなければなりません。司祭たちは今年一年を通して、ミサをあげる姿勢、動作に関して基本的合意を得るために研修を行うことをお勧めします。

ミサ典書改定版発行にあたって、ローマ典礼省による規定を遵守することも念頭に入れて置く必要があります。同

時に地方の司教団にその実施の多くが任せられていることにも留意しなければなりません。ローマ典礼省自体が、母国の文化に適応する必要性を説いているからです。それでも、日本の司教団は、典礼に関してかなり厳しい線を守っており、典礼儀式の規定の変更には、必ずローマの承認を得ていることを思い出さねばなりません。典礼に関して、基本をしっかりと理解し、それにそって典礼の応用を考えることができます。若者や子どものミサ、特別な集まりのミサなどがそれに当たります。しかし、繰り返し申しますが、教会の指針を基本とした応用でなければなりません。「ミサ典礼総則」をしっかりと把握した上での応用となります。高松教区においてもこの線はしっかりと守ってほしいと願います。

3 聖体に関して

聖体を理解するためには、どうしてもミサという意味をしつかりと学ぶ必要があります。幸いに、教区本部に、今年4月より「生涯養成デスク」が設けられ、生涯養成担当者が任命されます。生涯養成担当者を中心としたチームが教区内につくられる予定です。これは教区として腰をすえ

て生涯養成に取り組む決意を表わしています。生涯養成の中に、当然のこととして、今年の目標である「聖体とミサ」の研修が組まれることとなります。四県をどのように網羅できる生涯養成コースになれるかは今後の課題となります。司祭の研修、信徒の研修などを年内に組むことで、「聖体の年」を盛り上げることが可能になります。大阪管区司祭研修会も、今年は「聖体」という課題を扱うことになっていきますので、司祭たちはそれを大いに活用するようにお勧めします。

結語

教区には多くの問題がまだ山積しております。しかし、忍耐して一歩ずつ歩むことを通して前進することができます。その前進とは刷新する教会の歩みのことです。外的なことにみにとらわれることなく、信仰者としての霊的確かな歩みを行うことが一番の課題です。そのためには「教会生活の源泉であり、頂点である聖体」への深い信心を深める年にすることとは大いに意義があると信じて疑いません。